



スキー-Oを楽しむ福田良雄

私とスキーとオリエンテーリング

はるか昔、青春真っ只中、学生時代の事です。信州・岩岳スキー場でスキー競技と触れ合いました。岩岳スキー学校の教頭先生からでした。その後、福島・高湯温泉スキー場、北海道・チセヌプリスキー場と渡り歩き、スキー宿の手伝い、送迎バスの運転などをして教えを請い、就職後は鳥取・若桜氷ノ山スキー場でコーチという名の居候。当時は12月に始まり、5月の連休迄年間40日くらい滑っていました。

雪の無い期間、オフシーズンのトレーニングとしてその頃流行りだしたオリエンテーリングを教えられ、こんな素晴らしい競技は無いと次第に感じました。その頃はアルペンだけでした。

平成と共に故郷の山口・周南に帰り、現在のスキーの師匠弘中進さんからノルディックスキーの教授して貰いました。山口県体育大会のスキーオリエンテーリングに出場の為です。それがスキーオリエンテーリングとの巡り会いです。それから私にスキーとオリエンテーリングが結びつきました。更に、競技を通じて武石氏とも知り合えました。

オリンピックに一番近い競技

I O F が取り上げるオリエンテーリング4つの種目、(フット、自転車、トレイル、そしてスキー、)この中で、最初にオリンピック種目に採用されるであろう種目として注目されるのが、スキーオリエンテーリング。

世界中が温暖化、日本国内でも地域によっては雪を見る前に桜の開花を先に見た所も多くあるとか。2007年2月末、スキーオリエンテーリング世界選手権ロシア大会が開催されました。オリエンティア各位は既に周知のように2年後には日本・北海道において次期世界選手権大会が開催されます。

歴史の古いスキー-O

日本にオリエンテーリングが導入されてすぐ、山口県では昭和46年1月17日県北部、広島・島根県境に近い羅漢山スキー場において、日本で最初と言われるスキー-O競技が山口県体育大会冬季大会のオープン種目として開催されました。競技は、スキー連盟の公認指導員を対象にして実施されました。参加者からは距離競技の苦痛を忘れ、コントロールを探し当てる喜びに新しいものを感じた者が多かったそうです。その後、山口県では山口県体育大会のスキー競技の正式種目として採用され、現在に至っております。残念なことに、ここ数年は暖冬で大会の開催が出来ていませんが・・・

山口県ではこのようにスキー-Oが恒例的に県体育大会の正式種目として採用されたほか、第1回西日本大会を秋吉台で開催。以降西日本大会・全日本大会等を数多く引受け開催、またインカレの最南端の開催県でもあります。これらは先人のオリエンテーリングに注ぐ熱意の結果です。なかでも、現在県協会顧問の河村文人先生にはこの功績等永年の功を評され昨年秋の叙勲で「旭日双光章」の栄えある勲章を受けられました。

2007 スキー-O世界選手権 ロシア大会での日本人選手

今年開催の世界選手権大会に、男子は堀江守弘、元木悟、三浦裕司の3名、女子は酒井佳子、元木友子、白鳥佳子、高橋美和の4名が代表選手として参加、順位こそ20位~30位となっていますが、次期開催国としての名誉を主張して来ました。中でもスキー-O発祥の国スウェーデンにスキー留学していた堀

江や女子の酒井の実力は国際級です。彼ら二人は特に注目を集め開催国有利と言われるこの競技の次回の夢を託しました。

事実、今回開催国のロシアは開催種目全てに実力を発揮、他を寄せ付けない成績でそのほかの選手を圧しました。

また、注目とする点はオリンピックを意識したマスメディア対応プロセス。スプリント種目では「ラビリンズ」と呼ばれる、赤いネットで組んだ、地図では紫の表示となる迷宮を作り、その中走り回る選手の姿を観客に見せる演出も採用されたそうです。結果、スプリント種目の登場でスキー-Oは、森の競技から、スタジアムでの造られた、見せる競技に変化しています。

2009 スキー-O世界選手権

いよいよ2年後は日本での開催です。ルスツリゾートは北海道の空の玄関口千歳空港から車で90分、留寿都村に広がる巨大リゾート施設。ここに2年後の2009年3月には世界のトップ選手が数多く集まります。来年は大会1年前のトレーニングキャンプも開催され世界のトップ選手の姿も見られるとか？

また、この地では、今年の初夏・6月にはフットの全日本大会も開催されます。

世界選手権準備委員会は日本の顔；山形の武石委員長以下少数精鋭でスタート。大会開催日程を1日縮小し、役員も20~25名のシンプルな大会とするようです。しいてはコスト低減を目指します。

(私も「必要なら協力」と委員長に立候補を伝えていますが、1昨年、愛知の時と比べ陸続きでない北の端、声が掛かるか如何か？しかし、依頼があれば行きたいところです)

機関誌「吉備路」をよろしく!

昨今、減少している大会、少しでも参加者を増やし、賑やかにしたいと願い、現在、毎月定例発行の機関誌「吉備路」を主宰、西日本の情報誌としてO-マガジンにも協力、IT化の波に逆らって紙版情報誌として頑張っています。

(福田良雄)